

# 福島県現代詩集

2020



福島県現代詩人会

安達真奈夫

# 天人五衰あるいは夢の奥で

異国のチャオプレヤーの川の流れよ

邇上する船の鍵の穴から岸辺の沈みかけた破船がみえる

長い病を押し絶え絶えに辿り着いた夢の奥で

私はただひたぶるに祈請に似た韻する律動を誦し

欲界六天 色界諸天に住する有情を識るのだ

天界にて情を遂げるとは 白い曼陀羅華が降りそそぎ

天人たち 夜摩諸天の男と女は手をとり合い

兜率陀天は心に想い合うだけ

天の須陀味を食し昼夜のにちにちが天界で変転する

化樂諸天は見つめ合うだけで諄香の哀愁を予感する

他化自在天は語り合うだけで 情を遂げるという

鳴呼 げに天人が情を遂げるとは

天人よ 遊行は輪廻の有情のなかにあって

五衰の定めにあるのに 何故に天擣香の薰りを燻し

簫笛琴箜篌の涼やか音のなかで

天空を翔び交わしているのか 生絹の領巾が風にそよぎ

虹色の光彩を放つ青白く細い腕を  
私はつかまえることが出来ない

遊行する天人よ

無為に咲くブーゲンビリアの花よ

赤き芭葉のなかの白き幻よ

私はいまアユタヤの破城の上に立ち  
遍く無常の欠片を手に持ち寂しげな後背は震いて止らぬ

遊行人よ 遊行人よ

迷妄の先にかすむ遙かなる彼岸よ

思えば

わが大乗の国は 何故か かく冷たくて寒いのだ

## この春よりは・・・

東びとよ ひのもとびとよ

ひととの花を折りて 何故唄う

花にも命あるものを・・・

魂鎮めらば 祈るらむ

さくらよ さくら

この春よりは墨染に咲け

あべわかこ

## シリウスの涙

少女の瞳に飛び込んでくる

命の断章

その視線の先にあるものは

故郷の海に弧を成す水平線の陽炎かがり

砂を踏む裸足に

蛎殻の欠片かけらが容赦なく傷を付け

鮮血を一筋海に還す

私たち人間も海からうまれた命なのです

かつて若者たちは

壠に詩を託し故郷の海に投げ入れた

清々しい面持ちで

或いは修羅の形相で

それは少女の目蓋の記憶

壠は隠岩の餌食となり

粉々に碎け散る

けれども割れたガラスは

長い時をかけ海の鼓動で磨かれるのだ

壠に込められた詩と共に

あの日

故郷の海はたくさんの命を欲した

夢にうなされる夜

地平線から迫り来る

笛の響きに翻弄される

目に見えぬ狩人たちが

波の狼を追っている

波立ちが次々に狼に姿を変え

地平線の土埃はいつしか

水平線の陽炎となる

三月の夜、少女の瞳に

あの日も天上で瞬いていた

シリウスの涙が映った

物言わぬ海の上には

吹き抜ける冷たい風が

笛の響きを渡らせていく

菊地清寿

## 切断

— ぼく1人です。 —

切断されようとしている。

高さ120メートルの排気筒  
切斷作業開始

深海にある投光器

福島県自治会館

底冷えする空間  
静止画像

防寒着を被る。

午後10時46分18秒（日本標準時間）  
館内放送。

ニンゲンには

死者数と金額を告げたと云う。

告げられたニンゲンは

夢想するぼくと

見ず知らずのきみに

いくらだつて冷たくなれるのだろう。

誰も語らないなら

ぼくが  
きみに

ぼくが  
きみに

きみに

きみに

どこでもない國のことだが  
行ないは

ほんとに正しかったのですか。  
この國は

危ない

救けてください。  
— サイレンが鳴っています。 —

俯きながら  
侘しい異国の地下道を上っていくと  
きみが下ってきた。  
踊り場の辺り  
下も上も真っ暗闇  
身体と精神を揺さぶり  
入れ替わった。

## 丹治計二

# 万靈塔

古に全てのものに靈があり  
その靈と 全てが  
関わりを持つと万靈塔に  
深い思いを託した人々

パソコン スマートフォン  
原子力発電 飢餓 貧困等々  
日々はいつしかに過ぎゆき  
思いがけない人の逝くも聞けば  
途方に暮れて

こころ惑う

碑の上部には蓮の花一輪  
草木虫魚万靈供養塔  
ここにもかって 虫や魚や

古屋敷村村中

草木へと念おもいをささげた人たちがいた

この世での回向

死者は必ず菩薩となつて  
振り返る世に尽すという  
靈は綺麗な命場

なべてに宿る菩薩たち

## 穴惑い

小川の岸の陽だまりを行く蛇さんも  
畑の畝を跳ねる  
蛙さんの動作も  
ゆっくりだった

もう霜月 冬がくるよ  
お家を探さなくちゃ  
木の根っこ 石の下  
木の葉の屋根  
いいえ いいえもつと  
いつもより 太い樹の  
もつと 大きな  
安心 探さなくちゃ

二階堂晃子

## 「家」の終わりに

八年目の豪雨がとどめを刺した

満身創痍の蔵に

さび付いたかんぬきを叩き壊し

扉を開ければ

屋根に空を覗かせ

泥と線量にまみれた歴史の束が

朽ち果て 山を成し

「家」の終わりを告げていた

さなぶり 刈入れの結いをもてなした

朱塗りの盆 会津塗りの汁椀 濬戸もの

弔いの度 灯された大ちょうどん 家紋入り花挿し

床の間で名言を語っていた掛け軸の束

杵音高く餅をついた臼

水に洗われ固まって めくれない過去帳

文学全集 古書 映像が溶けたアルバムの山

語らず証言して来た父の軍服 ゲートル 水筒も

透明なビニール袋に詰め込まれ

取り置きたい物に伸びる手を鎖で結び  
受け継ぐ手筈だった 歴史の束

マスクと軍手 ほこりにまみれて佇む住人の  
慚愧と無念を置き去りにして

エンジンふかす四トントラックのピストン輸送は  
中間廃棄物処理場へ歴史を捨てに行く

壊されゆく蔵の傍らに 水仙が三株  
まっすぐな葉に つぼみを抱いている

連れて帰ろうと さび付いた鋤を手に  
てこの力で掘り起こす試みをしてみれば  
葉だけが切れて 球根まで届かない

ああ ごめんねと

二株目の水仙に鋤を差し込むも  
根本の白い葉で切れて

球根は また 起こせない

「家」の終わりに

ここでこそ咲いていたいのか

ここでこそ根付いていたいのか

早春の葉を まっすぐ伸ばし

球根は 土深く黙していた

廣川秋男

## 線香花火

線香花火には三つの秘話があると父が語った

最初にパチパチと弾け散る火は

美しい牡丹の花を象徴したものだ

心の豊かな人の一生を讃えた火の輝きだ

次はね一番火薬の入ったところだ

大きく砕け輝き散るのは松の葉っぱだ

春枯れの葉というものだよ

春の装いのときに深緑に隠れて

人知らず間に散つてゆく男のような火だ

最後に点る火は柳を象徴したものだ

しなやかに生きる柳のような日本の女だ

僕は黙つて聞いていた

父はきっと四十に満たない歳で逝つた

母の生涯を美しく語りたかったのだ

盆が来ると父は線香花火を買ってきて

子どもの僕らと花火をした

花火のように短命だった母の一生を  
僕らに伝えたいと思つていたのだろう

## 七夕まつり

奈保子と萌美が七夕祭りをした

近所の家から破竹を頂き千代紙と紙人形や

小さく細工の飾りをつけて

あの空の星に祈るのだという

奈保子が覚えたばかりの漢字で牽牛と書くと

萌美は織姫と細字のペンで記していた

一つは物語の反対にもう一つの物語がある

一つの言葉の表にもう一つの裏の言葉がある

それを知るのは何時の事だろう

一つの言葉に流されず

一つの感情に流されず

大人になったとき二人は彦星や織姫でなく

喜怒哀楽の人間であることを知るだろう

七夕祭りの意味を知るだろう

松坂佳生

## 砲丸投げ

球体は天空に離され  
放物線を描いて進んでいる

鎧びついていた津波の殻が大地に見える

右手の五本の指で

鉄の球体を掴み

自分と相性のよい

色彩の滑り止めを

右耳の下と頸の上に塗り

球体をリンパの脇に留める

いつも心は負の形ではない

未来への聰明な旅立ちを  
その先は銀河 銀河だ

心臓から送り出された  
血液が

整理されている

骨たちが一体となり

鐘を鳴らす

準備は整った

ウオー ウォーと

声高らかに

岩田武昭

## 暮らしこと現実

オトコと一緒に暮らすというのは

お店で気に入った扇風機が  
部屋では音がうるさくて

風量調節がいまひとつという感じかな  
まあ距離を保てば使えるしね

オンナと一緒に暮らすというのは  
お店で気に入ったストーブが

部屋全体は暖まらないけど

正面を向いていれば暖かいという感じかな  
まあ火傷に注意すれば使えるしね

ああ、おれのちんこきれいだから  
手を洗っておしつこするからね  
汚れた手で大事なちんこ触るの嫌だから  
と言つて出て行つた

反論できずに見送った  
なるほど、チーフがモテるのは  
ちんこを大切にしているからなのか

ボクは、ちんこは汚いからと  
汚れた手で触つても気にならない  
だからモテないんだ

鏡に映る自分を見て考える  
そうだよな、ちんこは時々別人になる  
親しき中にもエチケットなのか

エチケット？

ちんこの温もりがついた手で  
接客するのがエチケットでいいのか？  
それでエッチゲットでいいのか？

アルバイト先の男子トイレでチーフが  
手を洗わずに出てよとしたので呼び止めたら

しばらくしてそのアルバイトをやめた

## エチケット

片岡真琴

## 臍の緒に胎盤

左向きに眠る癖は赤ん坊の頃から変わらないねと母に言われるたびにいつまで左向きで眠れば赦してもらえるのだろうかと思うけれども

もしかしたら母が死ぬまで左向きで眠らなければならないのかと思うともはや絶望しかないような気がしないでもない三十路を過ぎ立冬

臍に付いた儘の臍の緒からこの身体の養分を吸い取つていくんだ母

(あの頃はわたしがあなたに栄養を与えていたの)

そんな気がしないでもない

いつの間にか四十を迎えて未だこの顔面に胎盤は張り付いた

鼻孔を塞いで窒息させる氣か

母よ  
なあ母よ

産婆さん

裁ち鋏でも剪定鋏でも構わない  
生まれたらすぐに切ってやってくれ

あのこの臍の緒を

臍の緒の先を辿つて行けばあなたがたの胎盤に未だに繋がったままのこの臍の緒は桐箱の中で恐らく当時は純白であつただろう脱脂綿にくるまれてミイラ

胎盤に繋がつた儘のミイラ

地深く根を下ろし

土を掘り

土を掘り

墓石となつて芽を出し因果

まさか死んでからもずっと

福西トモ子

## 熱帶夜

短い時間と猛暑の中での別れだった  
次の日四角い白い布に包まれた遺骨は  
都会に別れを告げるかのように  
歩くたびコトコト

なまたたかい風が吹く  
ネオン町に照らされながら  
重い気持ちで坂道を歩く  
歩道からのひな臭い匂いの  
ムツとする中

身体から一気に流れ出る汗と  
慌ただしい時間に急かされた  
不思議なほど心は冷静になっていた

離れがたい足音を靴底で確かめながら  
置き去りになつた私  
迷子になつたのは私

兄は誰にも看取られず亡くなつた  
真面目で理想を求め

やさしさ故に決断も鈍り  
熱帯夜に耐えられなかつたのか

私はその日警察の安置所で  
眠つたままの兄と再会した

# まじまきみえ

## 待つ

九階の窓から見える広い空に  
ゆっくりと雲がながれ

日差しが西にかたむいていく

夕方の六時すぎ

仕事を終えた妻が

夫の洗濯物をもって

前のめりになりながら

病室に入ってくる

その時まで

窓ぎわのベットに横たわったまま

こうべを傾げ

秒針のない円い形の文字盤を

愛しむかのように見つめている

兄は少年のような  
熱い心を抱いてひたすらに  
時計を見上げる

飲むことも食べることも叶わない

胃ろうの手術をしてからは

昼どきが来ても

食事が運ばれてくることはもう無い

それでも兄は

ひつよう時に時計の針を追いかける

根本昌幸

## 詩よさらば

おれの生き方だったから  
しかし  
とも思う。

詩よさらばよ  
おれは間違った道を  
長いこと歩いてきた。

もっと早くに  
気付いていればよかつたものを  
気付くのが遅かった。

こんなに年齢を重ねてしまつて。  
馬鹿だな。  
馬鹿だった。  
(馬と鹿は利口なんだが。)

でも それによかったのかも  
知れない。  
と思う。

さらば詩よ  
さらばよ  
別れは辛いけれど。  
詩なんか書かなくたつて。  
読まなくたつて。  
生きて行けるのだ。

みうらひろこ

## "まさか"

人生には思いもかけない沢山の「さか」があります  
「まさか」がそうです

こんな訓辞どこかで一度は聞いたことがおありでしょう

水がここまで来ました

しろい壁にそれとわかる汚れた線上の跡  
あそこの川が氾濫しましてね

まさかの水没でしたよ

深刻な水害常襲地帯は西日本だという思いこみ

自治体の治水対策の甘さというより

それこそ「まさか」の想定外とでも申しましょうか

全長239キロの阿武隈川の

そちこちの支流での大氾濫

福島・宮城・岩手の三県は

令和元年十月の台風十九号と後日の豪雨で

深刻な被害をこうむりました

実は私も「まさか」の避難生活九年目です  
「安心・安全」の神話の上に胡座をかけてた  
隣町の原子力発電所の事故で

いわゆる原発避難民なんですよ

豪邸で暮していた人さえ、「まさか」の仮説住宅暮らし

忘郷の思いを抱きしめたまま

お骨になつてからやつと故郷に帰れました

「津波浸水域・ここまで」の警告標識が

国道六号線には掲げられています

あの日三・一の大地震による津波の到達地です  
津波は町や田畠を呑み込んで  
この六号線で止まり、あるいは乗り越え  
「まさか」の大惨事でした

竜骨をさらした船や車が

アワダチ草の黄色い波に座礁してました

「まさか」ここまで波が……。

人生にはあっちでもこっちでも  
「まさか」の坂があるものです

まさか私も直面してるとは思いもしませんでしたがね

小林真代

## 大抵の川は

大抵の川は  
ふるさとの川に似て  
という話をかなしんだ  
似て非なる川  
眺めて泣いた

病弱の妹がいることは知らなかつた

二親の愛を受けたのは

どつちの娘

妹は眠る

姉は恋をする

一つ屋根の下で

ざあざあと流されてゆく川で  
鳥の群れがこちらに尻を向けているのを見ていた  
あれは冬だったか

それとも冬のような春だったか  
橋の上をゆくものは  
おおかたが正しい方向へ  
川なら海へゆくように

大抵の川は  
ふるさとの川に似て  
声の大きい父に似て  
指の冷たい母に似て  
いま泣いているのは  
どつちの娘

そんなこと、  
娘ならどつちでも。